

鷗外「舞姫」のテエマについて

芦谷信和

「舞姫」は明治二十三年一月「國民之友」(第六十九号)に発表された、鷗外最初の小説である。石橋忍月は、これに対する批評「舞姫」(同誌第七十二号)の中で、「『舞姫』の意匠は恋愛と功名と両立せざる人生の境遇」である、と迷べている。氣取半之丞の署名で書かれた、この忍月の批評は、「舞姫」への批評中最も深密なものであり、かつ鷗外の反駁を惹起したので、ひとつの史的意義を有するようになつた。このためテエマに関しては、これが通説となつたかの観がある。鷗外の反論は忍月への回答というよりも、むしろ逆襲的な形をとり、かつテエマに関する見解は批評の要点ではなかつたので、議論の中心を逸れたものとなつた。したがつて鷗外がこれを黙認したかのように考えられることになつたものと思われる。これに対して岡崎義恵氏は「忍月はこの作の主題を恋愛と功名との相関にあるといふが、(中略)真の主題は太田の反省にあると見られる」と述べている。これらとは別に異色ある意見としては、佐藤春夫氏

鷗外「舞姫」のテエマについて

の説が挙げられる。佐藤氏は忍月の見解を批判して、忍月はまだ近代を解さぬものであるとし、「これは家庭と國家や社会に奉仕する事を一念とした封建的な明治日本の一青年(それには鷗外自身の面影が大にある)が歐洲の文明を見ておもむろに近代精神に目ざめ、家庭とか社会とかいふ人間の約束から次第に解放されて立身出世などの意義を疑ひ、漸く個人の意識を得てニル・アドミラリな近代人となると同時に同類共通の性情たる人間性を知つて今までは取るにも足らぬものとしてゐた恋愛の真意義を悟り苦悶するといふ話で、要するに封建人が近代人となる精神変革史ともいふべきものが『舞姫』のテエマなのではあるまいか」と言つてゐる。

しかしながら私は以上の諸説とはいさゝか見解を異にする。小論においては「舞姫」のテエマに関して私見を述べると共に、さらに初期三部作における現実性に論及してみたいと思う。

二

この作品は、冒頭まず船室の描写に次いで、セイゴン港碇泊中の

船室にひとり留まる太田が、人知れぬ恨みを文に綴ろうとすること
を述べている。すなわち彼が五年前官命を受けて洋行の途に就き、
このセイゴンまで来た頃には、見聞するもの一切が新奇で、紀行文
には日毎幾千言を埋めた。しかるに

(前略) ことばは途に上りしとき、日記ものせむとて貰ひし冊
子もまだ白紙のまゝなるは、独逸にて物学びせし間に、一種の「ニ
ル・アドミラリイ」の氣象を養ひ得たりけむ、あらず、これに
は別に故あり。

げに東に還る今の我は、西に航せし昔の我ならず、学問こそ猶
心に飽き足らぬところも多かれ、浮世のうきふしをも知りたり、
人の心の頼みがたきは言ふも更なり、われとわが心さへ変り易き
をも悟り得たり。きのふの是はけふの非なるわが瞬間の感觸を、
筆に写して誰にか見せむ。これや日記の成らぬ縁故なる。あらず、
これには別に故あり。

これは別の理由、すなわち人知れぬ恨みのためである。あたりに人
のいぬ今宵、消燈までの余暇にその概略を筆にしてみようというの
である。こうしてこれから語られる、この人知れぬ恨みが「舞姫」
一篇の内容を形成しているのである。

佐藤春夫氏はこの作品のテーマを「封建人が近代人となる精神変
革史」とみたのであるが、こうした見解の是非については、作者鷗
外自身前掲の一節で主人公に仮託して答えている。近代精神を基調
とする、ものに動じぬ無關心の氣象や、対象の裏面を見透すリアル
な觀察眼の留学中に培われたことが、日記の記せぬ理由、即ち作者
の筆にしてみようとする事柄ではない。精神変革史は作品の中心内

容を逸れるのである。

(前略) 余は父の遺言を守り、母の教に従ひ、人の神童なりな
ど褒むるが嬉しさに怠らず字びし時より、官長の善き働き手を得
たりと褒めますが喜ばしさにたゆみなく勤めし時まで、たゞ所動的
器械的の人物になりて自ら悟らざりしが、今二十五歳になりて
既に久しくこの自由なる大学の風に当りたればにや、心の中な
となく妥ならず、奥深く潜みたりしまことの我は、やうやう表に
あらはれて、きのふまでの我ならぬ我を攻むるに似たり。(以下
略)

先述したように、この作品のテーマは精神変革史にはないけれども、
傑れた頭脳の欧州で培われた、近代的自我に発する鋭い觀察眼は、
太田の人知れぬ恨みの根源に向けられる。

余は私に思ふやう、我母は余を活きたる辞書となさんとし、我
官長は余を活きたる法律となさんとやしけん。辞書たらむは猶ほ
堪ふべけれど、法律たらんは忍ぶべからず。(以下略)

官長はもと心のまゝに用ゐるべき器械をこそ作らんとしたりけ
め。独立の思想を懐きて、人なみなならぬ面もちしたる男をいかで
か喜ぶべき。危きは余が当時の地位なりけり。(以下略)

自我の拡充を阻むものは封建的官僚機構なのである。
この様な封建的官僚機構は、本国を遠く離れた異国の地において
さえ、不断に太田豊太郎を束縛する。つねつね彼が学問の岐路に走
るのを憎んでいた官長は、彼がしばしば芝居に入りして、女優と
交わるという同僚の讒謔に依り、ついに彼を免職にし、即時帰国す

れば賂用を給するが、この地に留まるならば公給を受けることはできぬと通告した。異国において経済的の保障を断たれて、太田とエリスとの關係は最初の苦境に直面する。しかもこの苦境を救済してくれたかに見えた相沢謙吉が、実はその絶対政權とのつながりに依つて、彼等を引き離し、太田をして苦惱の十字架を背負わしめる役割を演ずることとなるのである。ある日相沢は太田を大臣天方伯に紹介し、伯の信用を獲得するためエリスと絶つことを奨めた。結局彼は氣弱くも友の忠告に従うことを約した。やがて伯に随伴してロシヤへ赴くことを咄嗟の間に承諾してしまふのである。

嗚呼、独逸に來し初に、自ら我本領を悟りきと思ひて、また器械的人物とはならじと誓ひしが、こは足を縛して放たれし鳥の暫し羽を動かして自由を得たりと誇りしにはあらずや。足の絲は解くに由なし。曩にこれを繰つりしは、我某省の官長にて、今はこの絲、あなあはれ、天方伯の手中に在り。(以下略)

封建的社會の官僚機構は執拗に彼を捉えて、その自由を拘束するのである。後日大臣は太田を招いて、ともに帰東することを奨めた。伯は相沢から太田に係累なしと聞いていたからである。太田はいまさら偽りであるとも言えず、また今伯の手に縋らねば、帰國の道も失い、名譽回復の機会をも失し、この異國の地に朽ち果てねばならぬことを懼れて、伯の申し入れを承諾してしまふ。このように観てくると、太田の行動は一々官僚機構の規制を受けていることがわかるのである。「相沢の助にて日々の生計には窮せざりしが、此恩人は彼を精神的に殺しゝなり。」この一文は、そのまゝ「嗚呼、相沢謙吉が如き良友は世にまた得がたかるべし。されど我脳裡に一点の彼

を憎むこゝろ今日までも残りけり。」という結句に結び付く。天

皇制絶対政權に連なる封建的官僚機構は、自我を放棄してでも彼等に忠実なる者には、俗悪な立身出世主義と名譽慾を充足し、金錢的便宜を供するけれども、それは人間を精神的に圧殺してしまふ。忠実な服従者には俗悪な物質的援助を惜しまぬが、精神的には人間性を阻害する官僚制の姿は、こゝに明確に浮き彫りにされているのである。彼等は先に太田を器械的な生きた法律にしようとして企て、彼が歴史・文學等の精神面に心を向けることを憎んで、彼の職を免じた。

そうして今度はそれが相沢の手を通じて行われたのである。太田の憎む相沢は、友としての相沢ではなく、官僚機構の走狗としての相沢なのである。

以上に依つて、「舞姫」を形成している太田の人知れぬ恨みの背後には、歴然として絶対制官僚機構の姿が捉えられていることがわかる。

三

主人公太田豊太郎の行動は一々封建的官僚機構の規制を受けており、この作品を形成している太田の苦惱の奥には、歴然としてその正体が捉えられている。一体この作品のテエマというのは、恋愛と功名心の相剋とか、太田の反省とか苦惱とかの事實にはなく、こうした事實の奥に秘むところのもの、即ち絶対制官僚機構に対する批判に存するのである。そうしてそれは太田の苦惱を透して見事に形象化されている。こゝにおいて私は、鷗外は明治の先駆的知性の近代精神への覚醒を阻む封建的官僚制度の正体再現をはかり、こうした社会的現実に対する民衆の認識を意図して、この作品を書いたの

であると思う。

そうしてこの様な圧力を打破してゆけぬ自責の念のために、太田の苦悩は一層深刻な様相を帯びてくる。

(前略) 嗚呼、何等の特操なき心ぞ、「承はり侍り」と応へたるは。

黒がねの額はありとも、帰してエリスに何とかいはん。「ホテル」を出でしときの我心の錯乱は、譬へんに物なかりき。余は道中の東西をも分かず、思に沈みて行く程に、行きあふ馬車の馭丁に幾度か叱せられ、驚きて飛びのきつ。暫くしてふとあたりを見れば、獣苑の傍に出でたり。(以下略)

(前略) ここ迄来し道をばいかに歩みしか知らず。一月上旬の夜なれば、ウンテル、デン、リンデンの酒家、茶店は猶ほ人の出入盛りにて賑はしかりしならめど、ふつに寛えず。我脳中には唯、我は免すべからぬ罪人なりと思ふ心のみ満ちたりき。

こうした自責の念は生ける死屍となつたエリスの痛々しい姿に刺戟され、彼女への愛着と封建的官僚への憤りに合して、彼の苦悩に深刻の度を加え、終いに癒すことのできぬ傷痕をその心底に刻するこゝとなるのである。

嗚呼、プリンディンイの港を出で、より、早や二十日あまりを経ぬ。世の常ならば生面の客にさへ交を結びて、旅の憂さを慰めあふが航海の習なるに、微恙にことよせて房の裡にのみ籠りて、同行の人々にも物言ふことの少きは、人知らぬ恨に頭のみ悩ましたればなり。此恨は初め一抹の雲の如く我心を掠めて、瑞西の山色をも見せず、伊太利の古蹟にも心を留めさせず、中頃は世を厭

ひ、身をはかなみて、腸日ごとに九廻すともいふべき惨痛をわれに負はせ、今は心の奥に凝り固まりて、一点の翳とのみなりたれど、文読むごとに、物見ること、鏡に映る影、声に応ずる響の如く、限なき懐旧の情を喚び起して、幾度となく我が心を苦しむ。

嗚呼、いかにしてか此恨を銷せむ。若し外の恨なりせば、詩に詠じ歌によめる後は心地すが／＼しくもなりなむ。これのみは余りに深く我心に彫りつけられたればさはあらじ(以下略)

この一節に我々は、苦悩のために傷悴しつゝ、帰国する太田の姿を見ることが出来る。彼は満身創痍で帰国したのである。その敗北はたしかに人間太田豊太郎の限界を示すものではあつたらう。しかしながら、それは決して「舞姫」の瑕瑾とはならない。中野重治氏は「太田豊太郎は、外国での恋愛を路傍のものとして捨て去ることはできなかつた。それは彼の生涯そのものに痛みとして刻みこまれた。同時に彼は、恋愛を生かすことのなかに彼の生涯そのものを生かすという新しい道をえらぶこともできなかつた。彼は決して、恋愛をとるか世俗の功名をとるかという二者択一で単純に一方を取つたのではなかつた。(忍月の評には、問題をそういう風にとつた傾きが全くなくはない。)結果としてその形になりながら、二者択一でなく二者の統一がどこかで望まれている点の文学へのはじめての表現、ここに『舞姫』の力が生まれたのであつた。」と述べているのは、傾聴すべき意見であると思う。なればこそ、その敗北に依つて、むしろ彼を制肘する社会的現実の苛酷さは、一層抜き差しならぬ実感を伴つて浮かび上つてくるのである。(しかるに、この作品のテーマを精神変革史と要約してしまふならば、それは実に不徹

底なる精神変革史と言わねばならぬ。太田は決して家庭や社会から解放されてはいない。ために精神変革史に重点を置いて観るならば、彼が国家の意志に伏し、エリスを捨てることによつて、吾が身の立身出世に資するといつた結果的な落着点をもたらず、不十分なものになる。力点が社会的現実にある以上、その敗北は決して「舞姫」の価値を低くするものではない。忍月は「蓋し著者は詩境と人境との区別あるを知つて、之を実行するに當つては終に区別あるを忘れたる者なり。」と評しているが、私は詩境が人境に一致したからこそ現実感を伴うのであると思う。文学が可能性の追究を試みる時、やゝともすれば現実遊離の弊に陥り易い。俗悪であつても、それが偽りのない社会の姿であつた。当時の民衆にとつては如何ともし難い現実だつた。と同時に、それは鷗外をめぐる現実でもあつたのだ。彼の肉親が彼の帰国を待ち望んでいる彼の祖国の現実だつたのである。

明治維新は天皇制絶対主義体制確立への変革であつた。しかもそれが上からの改革として行われた結果、抜き難い封建性は深く根を残すことゝなつた。明治十八年以後自由民権運動衰退の後をうけて内閣組織の成立(同年)、保安条令公布(二十年)、枢密院官制公布(二十一年)、憲法公布(二十二年)、国会開設、教育勅語公布(ともに二十三年)と、封建的な絶対主義勢力温存延命のための制度が次々に整備されていつたのである。そこには国粹主義の反動が見られた。これが明治二十年代初期の社会である。若い鷗外はこうした社会的現実を身をもつて感じ取つたのであつた。

この様な現実を改善するために戦うことは、立派な行為だと思ふ。

鷗外「舞姫」のテエマについて

けれども、いまだ民衆の目覚めぬ社会に、鷗外一人激して何が期待できよう。帰国の途を断たれ、空しく異国の大都に葬られてしまうの他はない。すべては了りである。こゝに思い至る時、「舞姫」一篇を著わして、こうした社会的現実の姿を人々の前に示し、民衆の自覚を促したゞけでも、その功は大きいと言わねばならぬ。これも現実改善への努力の表われなのだから。まして鷗外の近代文学進展への貢献の大を思う時、鷗外の投影たる太田の行為は、一面に倫理的責任を免れぬながらも、なお首肯することができるのである。

こゝで考えねばならぬことは、忍月との論争において何故鷗外がこの作品のテエマに就いて明言して、忍月の誤解を正さなかつたかという問題である。それには、鷗外が相沢謙吉の署名で発表した「気取半之丞に与ふる書」及び「再び気取半之丞に与ふる書」の反論は、鷗外一流の逆襲的、揶揄的な調子を帯びたものであり、かつテエマが批評の要点ではなかつたことが考えられる。さらに考えられることは、鷗外自身がこれを明言するに忌憚があつたのであろうということである。自ら明言するならば、官途にある身が作品を書いて、真向から官僚機構を批判したことゝなる。それには職を擲つ覚悟がなければならぬ。そうした危険を犯してまで、論争の必要があつたらうか。しかもそれは批評の要点ではないのである。鷗外が官界を尊敬していなかつたにせよ、彼を洋行させてくれたのは国家であつた。官僚機構は彼にかなりの経済的援助を与えた。後年には軍医総監・陸軍省医務局長にまで昇進した彼である。これも後のことであるが、小倉への転勤を左遷として彼は非常に憤慨したという。榮達慾もなかつたとは言えまい。こうした理由から鷗外はこの作品

のテエマを明言しなかつたのだと思う。俊敏な彼のことだから、こうした社会の欠陥は深く見抜いていたに違いない。しかも彼の立場はそれを指摘することを許さない。こうした矛盾から来る足掻き——それが彼の複雑な文学を形成し、そうした矛盾を弱点として自ら意識することに依つての自己防禦が、彼に逆襲の態度を採らせ、その歪みが彼に抑捺的な態度を採らせたのであると思う。

「舞姫」は従来全くロマンティックな作品として定評付けられてきた。この作品は異国における舞姫との恋愛というロマンティックな素材を、雅文で優麗典雅に描き上げている。私は、雅文というものが、「ものゝあはれ」的優美な貴族文学の媒材として平安朝に発した和文と、簡潔な中に無限の感情を蔵した含蓄に富んだ漢語との折衷に依つて成つたものであるが故に、貴族的な優雅さと余韻を兼ね具えた文体として、こうした浪漫の興揚に効果的な役割を果しているものと思う。そうして洋語の固有名詞を鏤めることに依つて、その文体は一層清新な風となり、異国を舞台として、エキゾティックな情緒を漂わせることに成功している。しかしながらそれだけが「舞姫」の価値のすべてではない。むしろそこには先述した様な鋭い社会批判の眼が光つていたのであつて、この様なリアリズムこそ、この作品の価値を決定する重大な要素であると思う。社会批判という進歩的・尖鋭的でありながら——というよりも、むしろ進歩的・尖鋭的なるが故に——時流には刺戟の強すぎるものを、ロマンティックな優雅な情緒で包んでみせねばならなかつたところに、明治という時代の未熟さを見ることができるとはなからうか。

四

「舞姫」に表われた、こうした深刻な社会的苦惱は、これと併せて三部作と称せられる「うたかの記」(明治二十三年八月)「文づかひ」(二十四年一月)にも見ることが出来る。

「うたかたの記」は筋の展開の上に偶然性の多いロマンティックな作品である。が、国王に寵愛されて一時は栄えた画工の娘でありながら、父の死に依つて零落し、幼い頃から童売りをして口を糊し、世の辛苦を嘗め、今は美術学校のモデルをする不幸な境遇の少女マリイを殺すのは、国王であること、この国王のマリイの母親に道ならぬ思いをかけ、母を護ろうとした父に暴威を加え、諫めた内閣秘書官を塔に幽閉しようとし、大臣を故なく処刑する暴政振りなどに作者の社会観を窺おうとするのは牽強附会であらうか。

「文づかひ」では日本人小林は文使いを果たすだけの役で登場するが、それだけに傍観的立場にある人物の眼を通した観察は客観的であり、貴族社会の封建性に抗し、許婚者を選べる主人公イ、ダ姫の個性鮮かな人間像を見事に構成している。

「近比日本の風俗書きしふみ一つ二つ買はせて読みにしに、おん国にては親の結ぶ縁ありて、まことの愛知らぬ夫婦多しと、こなたの旅人のいやしむやうに記したるありしが、こはまだよくも考へぬ言にて、かゝることは欧羅巴にもなからずや。いひなづけるまでの交際久しく、かたみに心の底まで知りあふ甲斐は否とも諾ともいはるゝ中にこそあらめ、貴族仲間にては早くより目上の人にかきめられたる夫婦、こゝろ合はでも辞まむよしなきに、日々にあひ見て思むこゝろ飽くまで募りたる時、これに添はする習、さりとはことわりなの世や。」

「あるとき父の機嫌好きを覗得て、わがくるしさいひ出でむとせしに、気色を見てなれば言はせず。『世に貴族と生れしものは、賤やまがつなどの如くわが儘なる振舞、おもひもよらぬことなり。血の権の贖は人の権なり。われ老たれど、人の情忘れたりなど、ゆめな思ひそ。向ひの壁に掛けたるわが母君の像を見よ。心もあの貌のやうに厳しく、われにあだし心おこさせ玉はず、世のたのしみをば失ひぬれど、幾百年の間いやしき血一滴ませしことなき家の誉はすくひぬ。』といつも軍人ぶりのこと葉つきあら／＼しきに似ぬやさしさに、兼ねてといはむかく答へむとおもひし略胸にたゞみたるまゝにてえもめぐらさず、唯心のみ弱うなりてやみぬ。」

「固より父に向ひてはかへすこと葉知らぬ母に、わがこゝろ明して何にかせむ。されど貴族の子に生れたりとて、われも人なりいま／＼しき門閥、血統、迷信の土くれと看破りては、我胸の中に投入るべきところなし。いやしき恋にうき身躰さば、姫ごぜの耻ともならぬ、この習慣の外にいでむとするを誰か支ふべき。」「カトリック」教の国には尼になる人ありといへど、こゝ新教ザックセンにてはそれもえならず。そよや、かの羅馬教の寺にひとしく、礼知りてなさけ知らぬ宮の内こそわが家穴なれ。」
自我を押し殺す貴族社会の封建性は、我が国の封建的習俗に結びつけて述べられている。ドイツ貴族社会に対する批判は、そのまゝ、我が国社会への批判である。「夕餉に急ぐまらうと、群立ちてこゝを過ぎぬ。姫の姿はその間にまじり、次第に遠ざかりゆきて、をり／＼人の肩のすきまに見ゆる、けふの晴衣の水いろのみぞ名残なりけ

る。」の結句に進歩的・個性的な姫を好感をもつて見送つてゐる小林即ち鷗外の眼を感じることが出来る。

以上述べてきた事柄に依り、これら三篇の作品はいずれも社会批判を基調として書き上げられてゐることがわかるのである。

最後に、小論は昭和二十九年十二月四日、立命館大学日本文学会近代文学研究会において報告したものを、再考補筆したものである。席上における会員諸氏の御批判を深謝すると共に、特に御指導を賜つた恩師和田繁二郎先生をはじめ、助言を丁載した畏友田口正直氏、記録拝借の便宜を戴いた森本修氏に深甚の謝意を捧げて、本稿の筆を擱くことにしたい。

(注)

- ① 「舞姫・うたかたの記他三篇文献抄」角川文庫P 一一二
- ② 「日本芸術思潮」V 3 上P 四八
- ③ 「改訂近代日本文学の展望」河出文庫P 二九
- ④ 事実、軍上層部は鷗外が官途に就きながらの文学活動を快く思つていなかったし、鷗外もまた、それに憤懣を抱いてゐた。(田口正直氏「鷗外小論」(本誌第二号所収)参照)
- ⑤ 「舞姫・うたかたの記他三篇解説」角川文庫P 一一八—一一九
- ⑥ 「舞姫・うたかたの記他三篇文献抄」角川文庫P 一一三—一一四
- ⑦ この辺、和田繁二郎先生著「近代日本文学史」に依る。
- ⑧ 岩波書店版鷗外全集著作篇(昭和二十六年六月—二十九年三月刊、全三十三卷) V 3 P 九〇—九二
- ⑨ 同右書P 九四